神奈川県立歴史博物館
Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History

論題	ペリー来航に関わる情報収集活動とその伝播について―画像資料を中心に―
著者	嶋村元宏
掲載誌	神奈川県立博物館研究報告―人文科学―　第 41 号
ISSN	0910-9730
刊行年月	2014 年（平成 26 年）10 月
判型	A4（210mm × 297mm）

【論文】

ペリー来航に関わる情報収集活動とその伝播について
―画像資料を中心に―

嶋村元宏

【キーワード】
金海奇観、大槻磐渓、西坂成庵、儒者、昌平黌

【要旨】
本稿は、日本を開国させるべく二度にわたり来航したアメリカ東インド艦隊司令長官マシュー・カルブレイス・ペリー提督をはじめとする、遣日アメリカ使節団員を描いた画像を主たる対象として、それらの画像がどのような人々によって制作され、伝播していったのかということを明らかにすることにより、これまでの幕末情報史研究に新たな視点を投じるものである。
具体的には、大槻磐渓編《金海奇観》（早稲田大学図書館所蔵）を分析し、昌平黌出身者という共通項で画像の伝達があったことを指摘した。とくに、昌平黌関係者である河田迪斎、関藍梁は、幕府全権応接掛林大学頭復斎の配下として、アメリカ使節との応接に参加し、ペリーを実見でき得る立場であったことから、使節団員の原図を描くことが可能であったことを明らかにした。
またその一方で、伊沢政義の配下として松代藩御側医高川文筌が応接に参加していた点については、従来知られていた事柄からさらに詳細な事実を示した。

はじめに

本稿は、日本を開国させるべく二度にわたり来航したアメリカ東インド艦隊司令長官マシュー・カルブレイス・ペリー提督をはじめとする、遣日アメリカ使節団員を描いた画像を主たる対象として、それらの画像がどのような人々によって制作され、伝播していったのかということを明らかにすることが目的である。この作業により、これまでの幕末情報史研究に新たな視点を投じるものである。

幕末情報史研究については、周知の通り一九八〇年代後半以降盛り上がりをみせている。

宮地正人氏が社会史的な視座からの政治過程への照射を試みる中で、「風説留」の歴史的位置づけについて論じた研究[1]を、その代表とすることができよう。「雑書」「新聞」「風聞集」等多種多様な表題が付けられたおおむね年月日を追って政治情報が筆写あるいは転写された数十冊から数百冊に及ぶ情報記録冊子である風説留による「全国レヴェルでの新しい社会段階」の成立が、その後輿論と「公論」がそれなりに成立する前提となったことを明らかにしたものである。

本稿で扱う画像資料については、ペリー来航時の状況をはじめ幕末の諸事件を題材とした画像資料が風説留を構成する一つの要素であると指摘しつつも、そこで想定されているのは瓦版や錦絵などの摺り物であり、本稿で分析の対象とする肉筆画ではない。そして、画像情報の蓄積について触れているものの、原画像の成立過程について言及されているわけではない。

また、ペリー来航時の情報に焦点をあてた個別研究としては、宮地氏も引用しているように[2]、岩田みゆき[3]、太田富康[4]各氏の研究がある。しか

しながら、いずれも文献史料をその分析の対象としており、画像情報の収集についてはまったく触れられていない。さらに、「ペリー来航予告情報」をはじめペリー来航前後の情報活動についてまとめた岩下哲典氏の研究[5]も同様である。

本稿で扱うアメリカ使節団を中心とする画像についてまとめたものとして、ペリー来航時の状況を含めその前後の異国船来航に関わる画巻、いわゆる「黒船来航絵巻」を集成した『黒船来航譜』がある[6]。そこで「黒船来航絵巻」全般について解説を試みた岩壁義光氏は、「嘉永七年の図譜は若干ではあるが作者を判定できる」とし、「高川文筌、松代藩樋畑翁輔、津山藩「画工」の鍬形赤子など」を第二回来航時に描いた画像の制作者として考察を加えている[7]。

その後、岩壁氏が具体的にあげた三名の絵師のうち高川文筌と鍬形赤子については研究の深化が見られ、その成果が報告されている[8]。

まず、高川文筌については、影山純夫氏が美術史の立場から、真田宝物館に伝わる高川文筌関係資料を詳細に紹介しつつ、作家論として文筌について検討している[9]。さらに松下愛氏が影山氏の研究を踏まえたうえで、あらたに真田宝物館に収集された高川文筌関係資料を紹介しつつ、幕府主催でアメリカ使節を饗応した際の文筌の活動について考察している[10]。

一方鍬形赤子については、内田欽三氏が津山藩[11]における御用絵師鍬形蕙斎を論じる中で、大槻磐渓編《金海奇観》（早稲田大学図書館所蔵）に赤子の描いたペリー等の肖像画が含まれることから、《金海奇観》の内容について詳細に紹介するとともに、ペリー来航時における赤子の活動に言及している[12]。

なお、阿部征寛氏は、横浜開港資料館が所蔵する堀口貞明の手になる《米艦渡来紀念図絵巻》を分析し、堀口同様アメリカ使節の動向について探索していた他藩の藩士からも情報を得たり、江戸城内で画像情報を入手していたことを明らかにしている[13]。

本稿は、以上の研究成果を踏まえつつ、いかなる立場にあった人々が、アメリカ使節団員を実見し、画像を制作することが可能であったのか、そして、どのようなルートを通じてその画像が伝えられていったのかということを明らかにすることを目的とするものである。すなわち、文字ではなく画像という情報媒体の制作過程とその伝播の実態を明らかにするつもりである。そのため、ペリー来航に関して数多く制作された画像[14]の内、はじめに第二回来航時の状況について藩命により情報集活動に当たった大槻磐渓がまとめた《金海奇観》[15]中に確認できる画像制作者を再確認する作業から出発する[16]。次に、名前が明らかとなった人物たちはどのような立場においてその画像を描くことが可能であったかを検討する。また横浜応接場の警衛を担った松代藩の情報探索活動ならびに応接場警衛に関して横浜へ派遣されることになった高川文筌が、アメリカ使節の画像を制作できた背景について新出史料を利用して追究する。そして最後に、近年その存在が明らかになった大槻磐渓がまとめた《金海奇観》と同名の西坂成庵がまとめた《金海奇観》[17]を比較検討し、その関係性から伝写の実態に迫っていく。以上の作業を通して、ペリー来航時の画像情報がいかに収集され、まとめられた後、さらにどのような関係をもつ人々によって伝写されていったのかという、ペリー来航時における画像を中心とする情報伝達の一例を示すことにしたい[18]。

一、大槻磐渓編《金海奇観》所収の画像

現在《金海奇観》と称するペリー来航時の画像を巻子にまとめたもの

は、大槻磐渓によるものと西坂成庵による二本が知られている。この二本の関係については、あらためて考察することとし、まず現在早稲田大学図書館が所蔵する大槻磐渓によってまとめられた《金海奇観》から、そこに収められた画像の制作者について確認する。

この《金海奇観》をまとめた大槻磐渓は、仙台藩医であり蘭学者としても有名な大槻玄沢の第二子として、享和元年に生まれた仙台藩儒で、名は清崇。一六才で昌平黌に入り、松崎慊堂に儒学を学ぶが、その一方で天保一二年に高島秋帆が行った徳丸原砲術演習をきっかけに西洋砲術に関心を持ち、その後江川太郎左衛門に入門し学頭まで務めている。またペリー来航以前から、老中阿部正弘への上書である『献芹微衷』において、親露開国論を主張する人物であった[19]。

その磐渓は、ペリー第一回来航時にも異国船情報に関する情報を収集していたようである。嘉永六年六月八日には、後に日米和親条約締結に際し幕府側全権となる林大学頭復斎へ、アメリカ船の処置に関して上書している。これは、前日七日に直接復斎のもとでペリー艦隊の来航に対する意見を求められたことの補足をなしたものであり、その中で、七日に復斎のもとを辞去したのち、浦賀周辺でアメリカ使節の動向を探索した者から新たな情報を得たとしている[20]。具体的にいかなる人物であるかは特定できないが、ペリー来航直後から磐渓へ異国船情報を提供していた人物の存在が確認できる。

では本稿の主題である画像情報の入手先に関して、第二回来航時に磐渓へ異国船情報、とくに画像情報を提供した人物を具体的に《金海奇観》から確認しておこう。本資料は、大槻家に伝わった一群の資料群に含まれていたものであり、乾坤二巻からなる。純粋な絵画だけでなく、題字や漢詩なども含まれており、それら文字だけの部分もそれぞれ一図と数えると、内田氏に従えば、【表】にみられるように乾巻は二二図、坤巻は一九図からなっている。

まず画像の制作に関係した人物を特定できる図を中心に確認すると、乾巻第一図には、本資料の題字である「金海奇観」が書かれ、末尾に「屏浦河田興」の名前が見える。第四図の応接所と和船が描かれた上部には「横浜応接所真景　甲寅三月藍梁関研写於金川寓居」とあり、「藍梁関研」が「金川」すなわち神奈川の滞在先においてこの場面を描いたものであることがわかる。第六図は、「魯西亜船」であるが、これはペリー来航直後長崎に来航したロシア・プチャーチン使節の船を描いたものであることが、その書き込みから知ることができる。原画は、長崎で版行された版本であり、それをもとに「馬場五郎」が描いている。第一八図の拳銃分解図は、大槻禮助、最後の第二二図は、ポーハタン号上でアメリカ使節団の一員であった羅森と磐渓の交わした両者の漢詩である。このほか、具体に名前は記されていないが、「三月七日即彼四月四日逢於横浜者」との書き込みから、この第一五図は磐渓自身が出会った兵卒エドアルド・ヨーリングを自らが描いたものであること、第一七図の拳銃の図、第一九図の拳銃の部品から第二一図の大砲までは朱印からこれらも磐渓によるものであることが判明する。

次に坤巻の巻頭であるが、第一図は四紙半紙継ぎされた横長の画面に、アメリカ軍艦を発した艀船が横浜応接所へ向かう嘉永七年二月一〇日の情景が書かれている。制作者を明らかにする書き込みはないものの、岩壁氏が指摘しているように、津山藩御用絵師鍬形赤子が描いた《米利堅人応接之図》の写であると思われる[21]。それに続く第二、三図も、それぞれ二月二二日、二六日のアメリカ艦隊の動向を定点観測により描いており、赤子の手になったものと考えられる。第六図の「米利堅製十二斤舶

【表】

No.	乾の巻	書込	西坂本	No.
1	題字	金海奇観　嘉永七甲寅屏浦河田興	題字は大槻磐渓	1
2	神奈川の沿岸部と海上の風景	横浜、応接所、権現山、房州鋸山、上総鹿野山	○	2
3	海上風景	田湖、子安村、新宿	○	3
4	応接所と和船（天神丸）	横浜応接所真景、甲寅三月藍梁関研写於金川寓居	○	5
5	応接所見取り図		○	7
6	異国船の側面	鮑厦旦（ポウハタン）使節彼理（ペルリ）居此舶	○	9
7	船の図	魯西亜国蒸気船、原図係長崎刻本雖非精工亦写其真者令附写以聊其異同馬場五郎嘗語余云両其火輪皆在水底使人不可見実出魯西亜創製他国所無云甲寅六月磐渓識	○	
8	（余白）			
9	異国船	米利幹蒸気フレカット舶舶号シュスケハンナ	○	11
10	異国船	マセドニヤ［船号］　此船係フレガット舶内有大砲百芹者	○	10
11	異国船	タランスポルトシキップ　運送船［船号］シュプライ	○	12
12	艀船	脚船（バッテイラ）	○	15
13	人物図	上官之者、軍卒之長、楽人	○	23
14	人物図	銃手号令官	○	21
15	兵卒	此人係和蘭アムステルダム之産年二十九歳　エドアルド・ヨーリング／三月七日即彼四月四日逢於横浜者		22
16	サーベル	馬甲剱		
17	拳銃	六響手銃　嘉永甲寅二月廿八日写於金川駅寓居（印）、Calts Pistol		
18	拳銃分解図	六響槍機関解剖図　大槻礼助作／甲寅六月		
19	火薬入れ	火薬缶（ゴウヤク入レ）（印）		
20	部品（？）	鉛丸鉄　（印）（印）		
21	大砲	ボート　ホウィッスル縮図		
22	漢詩	磐渓大槻崇　（印）（印）		
	坤の巻	書込		
1	神奈川海岸、海上の図	甲寅二月十日我欽差諸大臣始接米客之時駕脚船十八隻進横浜館図　此日上陸者彼理唖咀以下至楽人歩卒凡六百四十余人	○	4
2	異国船の動向	廿弐日払暁軍艦ハンダリア船名ソウタムプトン船名二艘揚帆赴豆州下田港図	○	6
3	異国船の動向	廿六日払暁船主ブカナン駕蒸気舶スェスキンナ船名帰帆本国図	○	8
4	異国船	蒸気敷勒噶多舶（フレガット）舶／弥斯失斯失必（ミスシスシッピ）［船号］図	○	13
5	艀船	来船、去船	○	14
6	大砲	米利堅製十二斤舶砲縮図、原図ハ浦賀与力合原某処作頗失其向背因拠其図改作者如此　甲寅五月　磐渓識、此砲御脚船（バッテイラ）上所器者水陸並用但船上器床陸上戦車此図則係其陸用者　同月　崇又識		
7	人物肖像画	米利幹合衆国水師提督彼理（ペルリ）肖像年五十八歳、此二図吾友関藍梁処親見而自写者神未奕丶面貌逼真但服飾以下甚拙與面貌実不相称因倩画工鍬形翁而改写者如此世間処伝彼理唖咀肖像当以此図為正　磐渓識、唖咀（アーダムス）肖像	○	16
8	人物肖像画	彼理、此二図係高川森嶺所写似不若関某所図之尤肖且并存以質親見者崇識、唖咀		17
9	人物肖像画	軍艦（フレガット）マセドニア［船号］之船主アボット［人名］肖像　位階ペルリニ同シ		18
10	人物肖像画	蒸気船シュスケハンナ［船号］船主ブカナン［人名］	○	19
11	人物全身図	号令官（コマンタント）テンスル［人名］、以上三図亦皆係関某原図而鍬形翁改写者	○	20
12	半身人物図	軍艦マセドニヤ／船主　唖仏暴多（アアボット）、彼理ノ子/オリイストペルリ	○	
13	半身人物図	和蘭通詞／卜的緜（ホッチメン）、日本通詞／衛廐士（ウリヤムス）、以上四図　高川文筌写	○	
14	客車の図	小火輪車格式（ストームワーヘン）　ヒナガタ	○	24
15	石炭車の図	碟炭架		
16	蒸気機関車の図			
17	レールの図			
18	電信機の図			
19	跋文	藍梁関研	西坂成庵	25

※左端のNo.は大槻本乾坤各巻の配列順を示す。
右端のNo.は西坂本の配列順を示す。
「／」は改行を示す。
（　）内のカタカナはフリガナを示す。［　］内は割註を示す。

砲縮図」はその書き込みから、アメリカ使節の応接にあたった「浦賀与力合原某」すなわち合原猪三郎の原図をもとに磐渓が描き直したものであることが判明する。

以下、ペリーをはじめ使節団員の肖像画が続くが、第七図のペリーとアダムスの肖像画の間の書き込みに注目したい【写真1右半分】。

此二図吾友関藍梁処親見而自写者神秉奕丶面貌逼真但服飾以下甚拙與面貌実不相称因倩画工鍬形翁而改写者如此世間処伝彼理唖咀肖像当以此図為正　磐渓識

とある。磐渓の友である関藍梁が実際にペリーとアダムスを見て描いた肖像画の顔貌は神々しいほど本人に似ていたのに対し、服装の描き方はあまりにも拙く、顔と不釣り合いであったので、「鍬形翁」すなわち鍬形赤子に描き直させたという。さらに第九、一〇、一一図の三図も同様に関が描いた図をもとに赤子が描き直したものであることを磐渓は記している。また、第八図のペリーとアダムス【写真1左半分】ならびに第一二、一三図のアボット、ペリーの子、ポートマン、ウィリアムズの肖像画【写真2】は、高川森嶺すなわち高川文筌によるものであることも、それぞれの書き込みから判明する。

次に続く蒸気機関車や線路、電信機などの献上品を描いた第一四から一八図については、制作者を知る書き込みはなく、最終第一九図は、再び「藍梁関研」すなわち関藍梁による漢詩である。

二、《金海奇観》の制作に関わった人々

以上、《金海奇観》に収められた画像制作者についてその書き込みから判明したのは、(一)大槻磐渓の他に、(二)屏浦河田興、(三)藍梁関研、(四)馬場五郎、(五)大槻禮助、(六)合原猪三郎、およびすでにその名前が明らかにされていた(七)鍬形赤子、(八)高川文筌である。以下、各人の履歴を紹介しつついかなる理由で《金海奇観》へ収録される図を制作し得たのかを検討していくことにしよう。

まず、《金海奇観》をまとめた磐渓その人は、応接所周辺で探索するのみならず[22]、乾巻第二二図の記述から、ポーハタン号へ乗艦したことが理解できる。アメリカ側は応接委員をはじめとした日本側を饗応するためポーハタン号へ招いており、その時に磐渓もポーハタン号を訪れたと考えられる。磐渓が描いた画像については、神奈川滞在時に制作したものもあるが、ピストルや大砲などの献上品類については、六月から八月にかけて制作している。

次に、題字を揮毫した「屏浦河田興」は、文化三年讃岐国高松に生まれ、字は猶迪斎、通称は八之助。江戸に出て昌平坂学問所で佐藤一斎に学び、のち一斎の娘婿となった。ペリー再来航に際し、交渉言語として蘭文とともに漢文が多用されることが予想されたことから、林復斎と松崎満太郎の補佐をするよう随行を命じられており[23]、神奈川条約（日米和親条約）の国字の草稿を起草している。アメリカ使節を間近に見られる人物のひとりであった。

三人目の「藍梁関研」はペリー来航時膳所藩儒だった人物である。文化二年近江国高島郡に生まれ、文政五年一七歳の時に昌平黌に入り林述斎について学んだ。このとき磐渓も昌平黌で学んでおり、この時以来旧知の仲であった。その後関は、天保二年から膳所藩に仕え、子弟の教授に当たっていた[24]。河田同様幕府応接掛林大学頭復斎の配下として応接に参加していたことから、ペリーやアダムスを間近に見ることが可能だったのである[25]。

四人目の馬場五郎と五人目の大槻禮助については、その履歴を詳らか

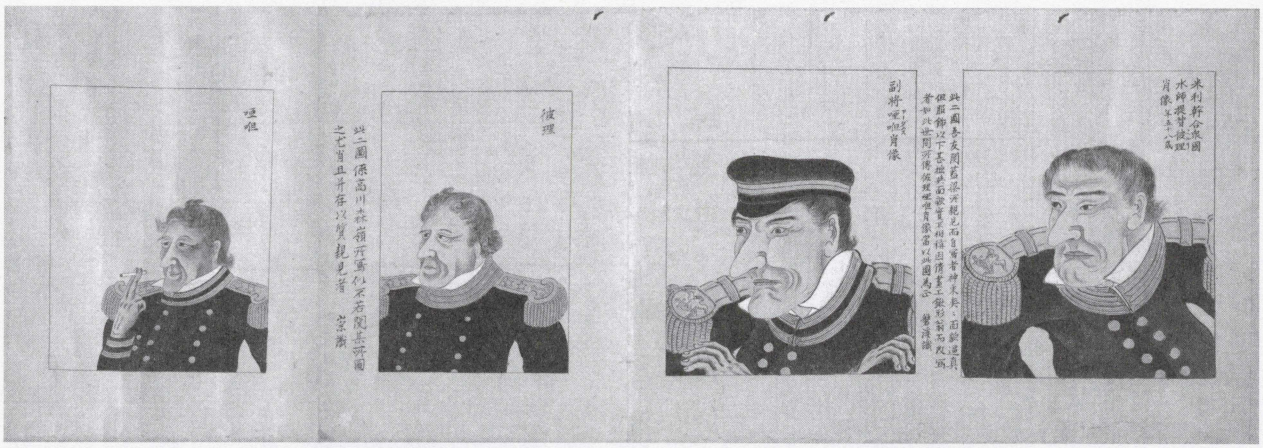

写真１　大槻磐渓編《金海奇観》早稲田大学図書館所蔵

写真２　大槻磐渓編《金海奇観》早稲田大学図書館所蔵

にすることはできない。おそらく馬場は当時長崎奉行所に関係していた人物であり、大槻禮助は磐渓同様仙台藩に属していた者と推測される。

六人目の合原猪三郎は書き込みにあるように浦賀与力であり、ペリー第一回来航時にアメリカの応接にあたった浦賀奉行関係者から応接の際の情報[26]が提供されたように、この《金海奇観》においても浦賀奉行所役人から画像情報が提供されている。

さらに、すでに岩壁氏や内田氏により《金海奇観》の関与が指摘されていた鍬形赤子であるが、赤子が津山藩御用絵師鍬形恵斎の養子に入ったことについては、内田氏が明らかにされたこと以上詳しいことはわからない[27]。アメリカ艦隊の動向を描いた画像については、赤子によるものと考えることに問題はないが、ペリーとアダムスの肖像画については、すでに見たように関藍梁の原画をもとに描き直していたことを再度指摘しておきたい。すでに触れた河田と関や、次に検討する高川文筌のように幕府側応接掛などのアメリカ使節の応接に関わる立場にあった者の随員であったという記録もなく、ペリーとアダムスを実見したとはにわかには断定しがたい。《金海奇観》に収められたペリーとアダムスの肖像画は、最終的に赤子が描き改めた画像ではあるが、磐渓が記しているように関藍梁が描いたペリーとアダムスの「面貌」は「逼真」であり、首から下の軍服については、赤子による修正がなされていると考えられるが、顔については関藍梁が描いた原図から大幅な修正を施していると考えることは妥当性を欠くように思われる。

最後に高川文筌である。生年不詳であるが武蔵国所沢に生まれ、もとの姓は三上であった。名は森嶺、諱は惟文、文筌と号した。文筌は松平定信に仕えた谷文晁に絵を学んだとされ、嘉永三年松代藩御側医師高川楽真の娘と結婚し高川家の養子となり、御側医として仕えるかたわら、絵師としても多くの作品を制作していた[28]。そして嘉永七年のペリー第二回来航時には、幕府側応接掛のひとりであった伊沢政義の配下として応接場内の様子を描く機会を得ということはすでに指摘されている。文筌が伊沢のもとどのような活動を見せたのかについては、松代藩の横浜応接場の警衛と情報探索活動を含め、章を改めて考察していくことにする。

以上、《金海奇観》に名前が見られた人物について検討してきた。その結果、《金海奇観》については磐渓も含め八名の人物が関与していることを指摘し得た。特に、河田迪斎、関藍梁、高川文筌の三名については、アメリカ使節の応接に関わる立場にあり、アメリカ使節の動向をつぶさに実見することが可能であった。

また、河田は画像の制作には関与しなかったものの、題字を揮毫し、関は応接場の周辺の情景とペリーとアダムスの肖像画の原図となる画像を磐渓へ提供していた。この河田と関および磐渓とを結びつけていることは、いずれも昌平黌で学んだものであることを強調しておきたい。昌平黌出身者というつながりが《金海奇観》の成立、すなわちペリー第二回来航時の画像情報の集積を可能としていたのである。

三、松代藩の情報収集活動と画像情報

松代藩第八代藩主真田幸貫が天保期の水野忠邦を首班とする幕閣において古河藩主土井年位とともに海防掛老中であったことに加え、海防の充実を図った老中松平定信の実子であったこともあり、松代藩はペリー来航以前から海外情報へ接する機会も多く、海防動員へも積極的に藩士を派遣する準備をしていた。ペリー第一回来航時には、第九代藩主幸教は品川御殿山警衛の一部負担を幕府へ願い出ている[29]。この時には、六月一三日に松代から藩士一五名が臨時出役を命じられたが、前日一二日に

ペリー艦隊が退去したとの報に接し、実際には警衛の任につくことはなかったが[30]、第二回来航時は、小倉藩小笠原家とともに横浜応接場の警衛を命じられることになった。

松代藩も、津山藩同様ペリー第一回来航時から異国船情報の収集に努めており、その情報は江戸藩邸に逐一報告され蓄積されている[31]。この情報収集活動の一端は、「神奈川公役日記」（以下、「公役日記」と略す）[32]によりアメリカ使節が横浜へ上陸した二月一〇日の状況について詳しく知ることができる。「真田侯藩中某」とあるだけで、姓名を明らかにしないが、この藩士は二月一三日早朝横浜における情報探索のため松代藩邸を出発した。六郷川を船で渡り川崎宿を過ぎたあたりは、「諸家の物見とミえて、既に数騎万年屋などに憩ゐたり」という状況で、他藩の探索方も活発に活動していたことが見て取れる。

藩士は神奈川宿に二つあった本陣の内、より横浜に近い鈴木源太左衛門の本陣を訪れている。幕府応接掛の一員でもあった浦賀奉行伊沢美作守政義は、ここを仮役宅としていた。松代藩軍議役佐久間象山とともに横浜応接所の警衛に、藩医として参加することが命じられていた高川文筌は、松代藩が本陣を構えていた増徳院ではなく、この伊沢の仮役宅に滞在していたのである[33]。文筌は、松代藩の海防臨時出役の一員として横浜にやって来ていたのであったが、伊沢の求めで伊沢付の医師として応接場内も含め伊沢と行動を共にしていた。医師としての立場ではあったが、実際には医師としてではなく絵師としての役割を期待されての抜擢であった[34]。

文筌は二月一〇日の応接場内で催された饗応の場面を描いており、藩士に対して「十日応接場饗宴図一幅稿本を観せ」、すべてほんとうの状況であるとして、その饗応の様子を詳細に語っている。そしてこの稿本を

館所蔵

もとに描かれ「江戸へ上呈さ」れたのが、おそらく老中阿部正弘に贈られた《亜米利加人饗応之図》[35]であると思われる。また、幕閣へ献上するものとは別に、「我君（真田信濃守）へハ窃に一幅を献覧致し度」と文筌と主君へ窃かにも献上することを考えていたようであり、現在真田宝物館に所蔵されている《横浜応接場秘図》がそれに該当するものとであろう[36]。なお、この応接場の様子を伝える画像は、《金海奇観》には含まれていない。

《金海奇観》に含まれるペリー等の肖像画は、《米利堅人等写真図》【写真3】[37]と題する画像である。《金海奇観》では、ペリーとアダムスがひと組として描かれ、別の兵卒の画像を挟んで、アボット、ペリーの子、ポ

ートマン、ウィリアムズの順に描かれているが、《米利堅人等写真図》ではペリー、アダムス、ウィリアムズ、ポートマン、ペリーの子、アボットである。「公役日記」では「使人ペルリを初めアハダムス、日本語に熟せし某、ペルリが子とて美少年、外ニ一人」となっており、配列に関しては《金海奇観》に含まれる画像とも、《米利堅人等写真図》ともちがっている。《金海奇観》に収められている文筌が描いたとされる肖像画は、文筌が描いた原図をそのまま収録したわけではなく、巷に流布していた模写本を収録したのか、あるいは文筌が描いた原図もしくは模写本をもとに、磐渓ないし別の人物が模写して収録した可能性があることを指摘しておきたい。

なお、松代藩には本来御側医である文筌とは別に三村晴山という御用絵師がいた。しかしながら、晴山が描いたアメリカ使節関係の画像は知られておらず、また晴山は、文筌のように正式に横浜応接所の警衛のために臨時出役を命じられてはいなかったようである。[38] だが、薩摩藩主島津斉彬をはじめとする大名までをもカバーする人脈をもつ晴山は、その人脈を駆使して、ペリーの二度にわたる来航時にも情報収集活動をおこなっていたことが明らかになっている。[39]

ペリー等の肖像画を描いた高川文筌が属していた松代藩の情報探索をみてきたが、文筌は松代藩士として横浜に派遣されていながら、実質的には、幕府応接掛伊沢政義のもとで、画像資料を制作していたのである。そして、このような伊沢と文筌の関係は、このときだけに限ったことではなく、恒常的に行われていたようである。ペリー艦隊が新たに開港場となることが決まった下田へ向かうと、伊沢は再度松代藩に文筌の下田行きを願い出ているのである。[40]

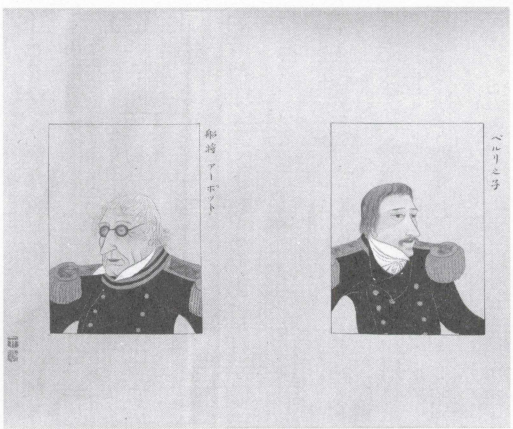

写真３　高川文筌《米利堅人等写真図》真田宝物

四、大槻磐渓と西坂成庵

最後に、これまで検討を加えてきた大槻磐渓の《金海奇観》（以下、大槻本）と近年その存在が明らかになった西坂成庵による《金海奇観》（以下、西坂本）（東京都江戸東京博物館所蔵）との関係について再度【表】によりながら両者を比較、検討し、画像情報の伝写の実態について一例を示しておきたい。

西坂成庵は、文化二年加賀国金沢に生まれた儒学者であり、名は衷、字は天錫。昌平黌では安積艮斎や大槻磐渓と親交を結んでいる。帰藩後藩校明倫堂の助教となっている。アメリカ使節の応接に参加した河田迪斎、関藍梁同様磐渓とも昌平黌で学んだもの同士であり、ここにも昌平黌出身者であるという共通点が見いだせる。

西坂本は現状では大槻本二巻四一図を一巻二五図にまとめ直しており、巻頭には磐渓による「金海奇観」の題字が認められ、巻末に自ら跋を認めている。大槻本が原本であることは、西坂本の序において磐渓自らが「金海奇観」の題字に続けて、「丁巳七月賀藩文学西坂君天錫請借以模写及」と言及していることからも明らかであり、磐渓の手許にあった《金海奇観》を借用のうえ成庵が制作したことに疑いの余地はない。ただし、大槻本と収録画像数に違いが見られる。制作当時に大槻本通りに写しておいたものが、後日表装のし直しなどのさいに欠けたり、あるいは

錯簡したりしたのか、当初から取捨選択したのかは現時点では俄に判断できない。

画像そのものは大槻本と西坂本とで大きな相違はないが、配列が変更されている箇所がみられる。以下、各図をみていきたい。

西坂本第一図は、すでに紹介したように、原本を貸し出した本人である磐渓によるもので、題字に続けて貸し出すことになった経緯が述べられている。成庵の求に応じて、手許にあった《金海奇観》を磐渓は貸し出したという。そもそも《金海奇観》は、仙台藩主への報告図として作成したものであるから、磐渓の手許にあったものは、その写本と考えるほうが妥当であろう。第二、三図はペリー艦隊の動向が描かれるのであるが、両者とも同じであるが、西坂本第四図は大槻本坤巻第一図である二月一〇日の情景に変更されている。その後も【表】に示したように、変更が加えられている。特に、西坂本第一〇図から第一五図にかけては、各艦船と艀船など船を描いた画像をひとまとめにしており、ほぼ時系列に沿って画像を配置した磐渓との違いが顕著に見られる部分であり、成庵の意図が見て取れる。配列は前後しているところを考慮すると、大槻本をまったくそのまま順序通り写したのではなく、画像ごとに模写し、一巻にまとめるにあたって配列順序を変更したと考えるべきであろう。したがって、人物図についても、大槻本で乾坤二巻に分けて収められていたものを第一六図から第二三図までに括っており、最初にペリー等の画像が見られるように配されていることは留意すべきであろう。

また、サーベル、ピストル、火薬缶などは含まれておらず、人物図でも、赤子が藍梁の原図をもとにしたペリーとアダムスがあれば十分と考えたためであろうか高川文筌が描いたペリーとアダムスの肖像画は省かれている。また、些細な点であるが、本来「高川文筌」と書き込まれているところが、「高橋文筌」と写し間違えられている。

なお、成立は、神奈川条約（日米和親条約）締結から三年後の安政三年一一月である。下田に駐在していた初代駐日総領事タウンセンド・ハリスが念願の出府を果たし、老中堀田正睦邸で世界の大勢を論じて、自由貿易を開始するのは避けられないことを説いた直後にあたる。それに加え、この年には、尊皇攘夷主義者のバイブルとでもいうべき、会沢正志斎による『新論』が玉山堂から版行された年でもある。尊皇的な立場に立つ西沢が磐渓から《金海奇観》を借用して、あらためてアメリカに関する情報を整理しようとしたとしても不思議ではない。

むすびにかえて

大槻磐渓編《金海奇観》をたよりに、ペリー等を実見し描いた人々がいかなる者たちであったのかを確認した。これにより、昌平黌出身者という共通項で画像の伝達があったことを指摘することができた。とくに、昌平黌で学んだ河田迪斎、関藍梁は、幕府全権応接掛林大学頭復斎の配下として、昌平黌教授松崎満太郎を補佐するという役を与えられていた。アメリカ使節団の対応に関し、林復斎、松崎満太郎、河田迪斎、関藍梁という昌平坂学問所関係者が実質的には応接掛の半数を占めていたのである。そして、画像情報の伝播という点についても、昌平黌つながりという儒者ネットワークの存在が確認できた。磐渓も昌平坂学問所で学んでおり、《金海奇観》の成立に昌平坂学問所関係者によるネットワークが強く影響していたのである。

さらに、磐渓から磐渓本を借り受け同名の西坂本を制作したのも昌平坂学問所で磐渓とともに学んだ加賀藩儒者西坂成庵であることを指摘しえた。これは、ペリー等の肖像画を描き伝えたことを如実に示す一例で

ある。

またその一方で、伊沢政義の配下として高川文筌が応接の場に立ち会った詳細な状況については、新出史料である「神奈川公役日記」を通して確認することができた。これまで見いだされていなかった高川文筌の活動について、松下氏が明らかにしたこと以上に新たな事実を付け足すことができたといえよう。

なお、高川文筌が饗応の様子を描いた真田家に伝わった《横浜応接場秘図》（真田宝物館所蔵）、老中阿部正弘に贈られたとされる《亜米利加人饗応之図》（個人蔵）、林大学頭復斎へ贈られたとされる《横浜応接秘図》（個人蔵）の相違については詳しく論じることができなかった。また高川文筌による《米利堅人等写真図》（真田宝物館所蔵）のようにアメリカ使節が横並びに配置された画像資料に配列の違いが見られることを指摘したが、その違いがいかなる理由で発生したかについても、明確にすることができなかった。同じような画像資料でありながら、このような異同が伝写の過程でどのように生じたのかという問題については、改めて検討したい。

註

（1）宮地正人「風説留から見た幕末社会の特質――「公論」世界の端緒的成立――」『思想』一九九三年九月号。のち、宮地正人『幕末維新期の社会的政治史研究』（岩波書店、一九九九年）に所収。

（2）宮地、前掲書、第三章、参照。

（3）岩田みゆき「大久保家の黒船情報収集について」『歴史と民俗』第二号。のち、岩田みゆき『幕末の情報と社会変革』（吉川弘文館、二〇〇一年）所収。

（4）太田富康「ペリー来航期における農民の黒船情報収集――武蔵国川越藩領名主の場合」『埼玉県立文書館紀要』第五号。のち、保谷徹編『幕末維新論集　幕末と情報』（吉川弘文館、二〇〇一年）所収。太田富康「幕末期における武蔵国農民の政治社会情報伝達」『歴史学研究』第六二五号。

（5）岩下哲典『幕末日本の情報活動』（雄山閣、二〇〇〇年、改訂増補版、二〇〇八年）。

（6）大久保利謙監修『黒船来航譜』毎日新聞社、一九八八年。
本書には、財団法人霞会館展示委員会が「大開港展」シリーズとして、日本の開国をテーマにした展示事業で出品した資料が中心に収録されているが、本稿で考察を加える《金海奇観》（早稲田大学図書館所蔵）ならびに真田宝物館が所蔵する高川文筌が描いた画像資料は収録されていない。

（7）岩壁義光「近世対外政策の展開と『黒船来航譜』」（大久保利謙監修『黒船来航譜』毎日新聞社、一九八八年）一八三頁。
なお、岩壁氏が自ら述べているように、表題にある「黒船」とは、ペリー艦隊のみを指すものではなく、ペリー来航以前に来航した異国船を含むものである。

（8）樋畑翁輔については、本論で述べるように《金海奇観》にもその名を見いだすことはできない。翁輔の息子である雪湖が編纂して昭和五年に上梓した『米国使節彼理来朝図絵』に文筌が寄せた「横浜紀事」に、薬籠持ちとして応接場に入り写生したことが記されているだけである。ただし、『信濃国松代藩真田家文書』（以下、『真田家文書』と略称）国文学研究資料館所蔵）に含まれる多数の史料から翁輔が横浜へ派遣されていたことは確認できる。

（9）影山純夫「高川文筌論」真田宝物館編『松代―真田の歴史と文化―』第九号、長野市教育委員会・松代藩文化施設管理事務所。

（10）松下愛「高川文筌について――資料紹介と横浜応接場での様子――」『松代』第二二号、長野市教育委員会文化課・松代文化施設等管理事務所。

（11）岩壁、前掲論文でも指摘されているように、津山藩はペリー来航時に、藩士の箕作秋坪を二度にわたり浦賀へ派遣し、独自の情報収集活動を行っている。これについては、『江戸日記』（津山市郷土資料館所蔵）を利用した『津山市史　第五巻　近世Ⅲ―幕末維新―』（一九七四年）を参照。

（12）内田欽三「津山藩お抱え絵師としての鍬形家――江戸後期における大名家の画人

登用と、彼らの活動をめぐって――」『サントリー美術館論集』第四号、サントリー美術館。

なお、内田氏は大槻磐渓編《金海奇観》（早稲田大学図書館所蔵）について詳細な紹介をおこなっているが、書き込みについては一部あきらかな誤読（植）がある。本稿では、内田氏の紹介を参照しつつも明らかな誤りのある部分については、適宜修正した。

(13) 阿部征寛「堀口貞明の思想と行動」『横浜開港資料館紀要』第八号。のち、保谷、前編書、所収

(14) 嘉永六年六月と嘉永七年正月の二度にわたるペリー来航時に関する画像資料は、現在、博物館をはじめとする公的機関や個人によって所蔵されており、ペリー来航そのものを主題とする展覧会だけでなく、日本近代の始まりに関わる展覧会で多く出品されている。

これらのペリー来航に関わる画像資料は、同時期に長崎へ来航したロシア・プチャーチン使節に関わるものと較べても圧倒的に多く、その数を把握することができないほどの多種多様な画像が今日に伝わっている。なお、ペリー第一回来航時に関する画像は、ペリー艦隊が来航した際における各藩の海防状況すなわち警備態勢を俯瞰した、いわゆる「御固図」と呼ばれるものが大多数である。たとえば《海陸御固御場所附》（嘉永六年、神奈川県立歴史博物館所蔵）と題する瓦版や、アメリカ使節が久里浜に上陸した際周辺警備を担当していた彦根藩の配置を主題として描いた《ペリー浦賀渡来図》（［嘉永六年］八月、彦根城博物館所蔵）や《亜墨利加人栗濱上陸之図》（盛岡市中央公民館）などがある。

(15) 大槻磐渓編・画《金海奇観》二巻、紙本著色、嘉永七年、早稲田大学図書館所蔵。

(16) 第一回来航時については、前年オランダ領事官ドンケル・クルティウスがもたらした、いわゆる「ペリー来航予告情報」に接していた阿部正弘をはじめとする幕閣および一部の大名を除く大多数の人々にとっては「突然」の来航であったこと、また滞在していた期間がわずか一〇日間という短期間だったこと、さらにペリーがその姿を公の場に現したのが、大統領国書を捧呈するために久里浜に上陸した一度だけだったことが、ペリーをはじめとする使節団や艦隊の詳細について描くことができなかった理由として考えられる。事実、瓦版、多色刷り木版、肉筆でペリーや副将アダムスの肖像画が制作されているが、本人とは似ても似つかない顔貌である。したがって、画像による情報収集活動ならびに集積された情報がどのようなルートをたどって伝写されたかを解明することを課題としている本稿においては、第二回来航時に制作された画像資料を分析対象とする。

(17) 西坂成庵《金海奇観》一巻、紙本著色、安政四年、東京都江戸東京博物館所蔵。

(18) 本稿は、神奈川県立歴史博物館が主催した二〇一二年度特別展『ペリーの顔・貌・カオ――「黒船」の使者の虚像と実像――』にあわせて一般向けに作成した同名の展覧会図録で指摘したことを一部敷衍している。

(19) ペリー来航時においても、嘉永六年七月以降幕府が大統領国書を広く開示し、アメリカへの対応について意見を募った際に磐渓は、「愚衷」と題する意見書を提出し、親露的態度を示している。そのなかで、文化元年に来航したロシア使節レザノフとペリーを比較して、応接地ではない江戸内湾へ武力を背景に侵入し、大統領国書への返答を求めるペリーを非難したのに対し、幕府の国法に従って長崎へ来航したレザノフを評価している（『大日本古文書　幕末外国関係文書』（東京大学出版会、一九七二年～）（以下、『幕末』）之二、三二号文書）。

(20) 『幕末』之一、一一二号文書。

(21) 岩壁、前掲論文、一八三頁。

(22) 磐渓が高台からアメリカ艦隊の状況を描いたスケッチが磐渓の旧蔵史料の中に「貼り交ぜ帳」として遺されている。工藤宜『江戸文人のスクラップブック』（新潮社、一九八九年）参照。また、その史料をメインとした『塵も積もれば―磐渓先生の貼り交ぜ帳（スクラップブック）』展が、二〇〇六年一関市博物館で開催されている。

(23) 『幕末』之四、三八三号文書。

（包表）

「井戸対馬守殿　林大学頭」

拙家員長

河田八之助

右ハ、浦賀表江異国船渡来も候ハヽ、筆談等いたし候節儒者松崎満太郎手伝旁、為御用彼地江召連候積り、越中守殿伺之上召連候、此段為御心得及達候、

寅正月

(24) 石山洋他編『江戸文人事典―国学者・漢学者・蘭学者―』（東京堂出版、一九八九年）「関藍梁」の項参照。

(25) 「綏夷図巻跋」（河田迪斎『恵迪斎全集』第四巻、東京都立中央図書館河田文庫所蔵）。

(26) 「嘉永六年異国船渡来浦賀風説秘書」（神奈川県立歴史博物館所蔵）。

この史料も広く流布したようであるが、書名は「浦賀与力合原繰蔵ヨリ聞書」（東京海洋大学附属図書館所蔵）、「浦賀奉行与力より聞書」（国立公文書館所蔵）など、異同がある。

(27) 内田、前掲論文、参照。

(28) 文筌の経歴については、松下、前掲論文、四六頁による。

(29) 『幕末』之一、一四九号文書。

(30) 「日記　控」嘉永六年六月（『真田家文書』国文学研究資料館所蔵）。

(31) 前註25および「日記　控」嘉永七年正月、嘉永七年二月（『真田家文書』国文学研究資料館所蔵）。

(32) 「神奈川公役日記」（『開港日記』第十巻、東北大学附属図書館狩野文庫所蔵）。以下、探索方ならびに高川文筌についてはこれによる。

文筌が藩士へ話した応接場内部の状況は以下の通りである。

高川文筌（朱線）ハ作州の乞にて応接場の絵事をなせしとて、仮役所にあれバ訪問して窃ニ異聞する事あり、十日応接場饗宴図一幅稿本を観せしが皆写真也といふ、使人ペルリを初めアハダムス、日本語に熟せし某、ペルリが子とて美少年、外ニ一人斗り五人ハ、後に密談所に入りし者其他士官三拾余人、群集して腰を搨にかけて酒菓を給ひし所の図也、主搨にハ林学士、井戸坊尹、伊沢鎮台、鵜殿鑒察、松崎学士、其側に通事壱人座す、次の搨ニ有しハ浦賀組頭黒川嘉兵衛といふ人なり、其後に文筌有て絵事をなせしと云、彼理等密談所へ入りし後に席も乱れて異人等文筌が前に来集して、銘々の写真など所望せし由也、先一座に茶と菓子ヲ賜るアカステーラ也盆ニ盛て切足の台に載せ、茶碗も腰高の茶台にのせ給る、何れも菓子ハ好む、殊にカステイラを賞味せし由、大巻の有平ハ臂高に持てかぢり候体など、本邦の礼法をもて議せバ無礼とも鄙劣とも可申歟、酒肴ハ未醤仕立の吸い物魚不知取肴硯ふたもの銘々盛也作り身ぶりなりにて御酒賜りしが、酒ハ甘キを好ミ養老酒を飲候よし、肴ハ作り身の他ハ好まざるよし、皆々彼理が前を憚り先月廿五日浦賀応接場にて給りし時の如くにハ酔ざるよし、尤、ペルリ等ハ密談所にて酒肴を給る一同座席に連りて茶と菓子を給り候時斗なりと云、

なお、全文は『ペリーの顔・貌・カオ――「黒船」の使者の虚像と実像―』（神奈川県立歴史博物館、二〇一二年）一〇二―一〇三頁に収録している。

(33) 「亜墨利加人御警衛一件」（『真田家文書』国文学研究資料館所蔵）。

(34) 影山、前掲論文ならびに松下、前掲論文参照。なお、「公役日記」にも「文筌ハ夷舩にて諸奉行衆を招請する事あるときハ必伴行して写真せよと、伊沢鎮台申されしとて頻に悦べり」と、伊沢に応接の状況を描くように命じられたことが記されている。

(35) 《亜米利加人饗応之図》一巻、紙本著色、江戸時代末期、個人蔵（福山市歴史資料室寄託）。

(36) 《横浜応接場秘図》一巻、紙本著色、真田宝物館所蔵。なお、《亜米利加人饗応之図》と《横浜応接場秘図》とを比較すると、右に描かれた幕の見え方が異なる。また、林大学頭へ贈られたとする《横浜応接秘図》（一巻、紙本著色、個人蔵）と題する同様の図像が近年その存在が明らかになったが、明らかにアメリカ使節団の席順が異なっている。文筌が意図して相違させたのか、あるいは複数の絵師の手を経るうちに変わってしまったのか現段階では判断できない。本文で指摘しているように、肖像画の配列も異なっていることとあわせ、この異同に関する問題については別に改めて検討したい。

(37) 《米利堅人等写真図》一巻、紙本著色、江戸時代末期、真田宝物館所蔵。

(38) 「応接場警衛人数行列帳」（『真田家文書』国文学研究資料館所蔵）参照。本史料には、横浜警衛のために派遣された松代藩士の行列時の配列が記録されている。

軍議役佐久門象山をはじめとする横浜応接所の警衛に向かった松代藩士の名前が役名とともに順に記されており、応接場内でその様子を描いた高川文筌や樋畑翁輔の名はあるが、三村晴山の名前は見えない。

(39) 松下愛「松代藩の絵師・三村家三代」(『松代藩の絵師―三村晴山―』松代藩文化施設管理事務所・真田宝物館、二〇〇六年)一五―一六頁。

(40) 『日記　控』安政二年二月(『真田家文書』国文学研究資料館所蔵)。伊沢と文筌の関係については、まだ解明すべき点が数多くのこされている。今後の課題としておきたい

付記

本稿は、科学研究費補助金基盤研究(C)「ペリー来航関係画像資料の史料批判的研究」(研究課題番号:一八五二〇四八四、研究代表者:嶋村元宏)の成果の一部ある。

なお、本稿脱稿(二〇一四年五月)後、大槻磐渓編《金海奇観》(早稲田大学図書館所蔵)が雄松堂書店より復刻・販売されるとの情報を得た。岩下哲典氏による解説も付されるとのことであるが、その成果を本稿に取り入れることはできなかった。